

## 現代社会学科新入生交流会実施記録

鑑 さやか<sup>\*1</sup>・犬塚 剛<sup>\*1</sup>・森田 清美<sup>\*1</sup>・山崎 真帆<sup>\*1</sup>・小渕 高志<sup>\*1</sup>

**要旨：**コロナ禍で減ってしまった学生間の交流の機会を増やすため、本学では新入生と上級生との積極的な交流を図るべく方策がとられた。高校時代からコロナ禍を過ごし、そのまま入学してきた2023年度新入生（1年生）と、入学後にコロナ禍に突入し学園祭等の大学行事を経験しないままに学年を重ねていった在學生らにおいては、学年同士の横のつながりは何とか保てているものの、学年間の縦のつながりはなかなか作りづらく、学年相互に交友関係を形作る機会を提供する必要があると考えられた。現代社会学科では、被災地を視察する震災復興フィールドワークや学園祭等の行事に連動して、本年度3回の交流の機会を設定した。本稿は、その実施を記録したものである。

**キーワード：**学生交流、コロナ禍、震災復興フィールドワーク

### 1. 震災復興フィールドワーク

学生間の交流を図るため、現代社会学科では気仙沼市大谷海岸の清掃（ビーチクリーン）と震災遺構を巡る震災復興フィールドワークを企画し、2023年6月2日に実施した。当日は雨天だったため、大谷海岸での清掃活動を中止し、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館の見学、気仙沼市市議会議員の三浦友幸氏による講話の聴講と質疑応答の活動となった。

大学から現地までの往復の移動時間を要するため、交流会活動は終日を通して行われた。その実施の様様を大学HPに掲載した記事を本稿に再録するとともに、当日のタイムスケジュールを記した実施要項で振り返ろう。

2023年6月2日掲載の大学HP 現代社会学科  
ニュースより

記事名：【現代社会学科】気仙沼市へ震災復興  
フィールドワークに行きました。

6月2日（金）に、気仙沼市にて震災復興フィールドワークを行いました。このフィールドワークは、現代社会における諸問題について、地域、福祉、暮らしなどを様々な視点から捉え、それらの解決に向けて情報を収集し、分析する力を身に付けることを目的として行われました。

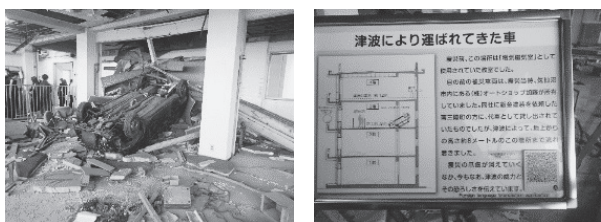
当日は台風2号接近のため、予定していた大谷海岸でのビーチクリーン活動はできませんでしたが、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を見学しました。その後、市議会議員の三浦友幸さんから、被災当時の状況や、現状と今後の取り組みをお聞きしました。

1時に、気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館に到着。震災伝承館のホールで説明を受けます。館内は撮影禁止なのですが、今回は館長に特別な許可をいただき、展示物や映像資料が写らないよう、学生の見学の様子を撮影させていただきました。

\*1 東北文化学園大学現代社会学部現代社会学科 学生委員会



次に、震災遺構を見学します。津波により運ばれてきた車に、津波の凄まじさを思い知らされます。



屋上にも出てみました。校庭はパークゴルフ場として整備されているのですね。



見学後、メッセージボードに貼る付箋に感想を書きます。みなさん、一生懸命書いていますね。



書いた付箋は、伝承館のホールに戻ってボードに貼ります。



テレビ局の取材を受けました。



気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館を後にし、次の目的地である前浜マリンセンターに向かいます。



前浜マリンセンターで昼食をとります。その後、気仙沼市議会議員の三浦友幸さんから震災復興の講話をお聞きしました。みなさん、熱心に聞いていますね。被災者でもあり、防潮堤建設に際し地域住民の合意形成の中核を担った三浦さんのお話を伺って、地域の抱える問題とその解決に向けた活動について、理解を深めることができましたね。



当日はあいにくの雨で大変でしたが、貴重な経験になりましたね。おつかれさまでした。

(記事出所： <https://www.tbgu.ac.jp/faculty-topics/62920>)

## 資料 1 : 現代社会学科新入生交流会実施要項

## 現代社会学科新入生交流会実施要項

1. 日時 : 2023 年 6 月 2 日 (金) 8:15~18:00
2. 場所 : 気仙沼市大谷海岸
3. 参加者 : 現代社会学科 1 年生 71 名、教員 12 名 合計 83 名
4. 目的 : ビーチクリーンと震災復興フィールドワーク

現代社会学部では、現代社会における諸問題について、地域、福祉、暮らしなどを様々な視点から捉え、それらの解決に向けて情報を収集し分析することができる力を育成することを目的としている。本交流会においては、現地に直接赴きビーチクリーンを通して被災地の現状を理解しつつ、今後本学部で必須となるチーム内での円滑なコミュニケーション能力の強化を目指した活動を行う。さらに、被災者でもあり、防潮堤建設に際し地域住民の合意形成の中核を担った三浦氏より講話をいただくことにより、地域の抱える問題とその解決に向けた活動について理解を深めることを目的とする。

## 5. スケジュール

日付	時間	活動内容
6月2日(金)	8:00	学生委員会集合
	8:15	体育館前に集合
	8:30	大学出発 ※トイレ休憩 : 三滝堂 PA
	11:00	気仙沼市東日本大震災遺構・伝承館到着 ・施設見学 ・ふり返しワーク
	12:30	伝承館出発
	13:00	大谷海岸到着 ・昼食 ※雨天時は、前浜マリンセンターを利用
	13:30	気仙沼市議会議員 三浦友幸氏による講話・質疑応答 ※雨天時は、前浜マリンセンターを利用 ビーチクリーン
	15:00	大谷海岸出発 ※トイレ休憩 : 春日 PA
	18:00	大学到着・解散

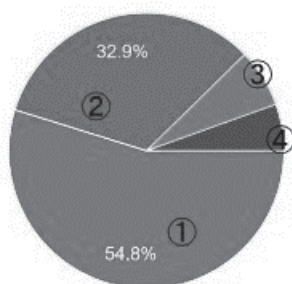
資料 2 : 交流会アンケート結果

# 現社交流会 2023 まとめ

■回答者 77 名 (参加 73 欠席 4)

## ■満足度

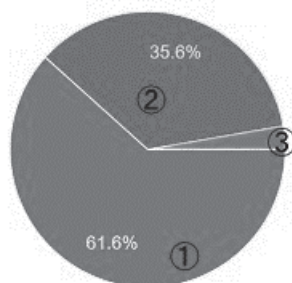
交流会は満足度についてお聞かせください  
73 件の回答



- ① ● とても満足した 40
- ② ● かなり満足した 24
- ③ ● どちらともいえない 5
- ④ ● やや満足した 4
- ⑤ ● まったく満足しなかった 0

## ■達成度

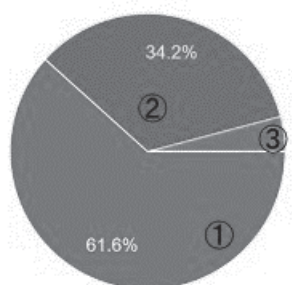
交流会の目的についての達成度についてあなた自身の考えをお答えください。  
73 件の回答



- ① ● 十分に達成されている 45
- ② ● ある程度達成されている 26
- ③ ● どちらともいえない 2
- ④ ● あまり達成されていない 0
- ⑤ ● まったく達成されていない 0

## ■意欲の状況

今回の交流を通して学生生活の意欲の高まりについて当てはまるものを1つ選んでください。  
73 件の回答



- ① ● とても意欲が高まった 45
- ② ● やや意欲が高まった 25
- ③ ● どちらともいえない 3
- ④ ● あまり意欲は高まっていない 0
- ⑤ ● まったく意欲は高まっていない 0

交流会実施後にアンケートを取ったところ、資料2の通りとなった。まず、交流会の満足度を尋ねたところ、「とても満足した」が54.8パーセント、「かなり満足した」が32.9パーセントであり、合わせて87.7パーセントであった。

次に、交流会の目的についての達成度を尋ねると、「十分に達成されている」が61.6パーセント、「ある程度達成されている」が35.6パーセントであり、合わせて97.2パーセントであった。

最後に、今回の交流を通して学生生活の意欲の高まりについて尋ねたところ、「とても意欲が高まった」が61.6パーセントで、「やや意欲が高まった」が34.2パーセントであり、合わせて95.8パーセントであった。

アンケートは、ふりかえりのワークも兼ねたもので、自由記述の欄を大きく取り、レポートの要素も備えていた。レポートのテーマとして3つの質問を出し、それぞれに答えてもらった。ここでは、学生らの回答を集約し代表的なものを紹介しよう。

#### ○質問1. 津波の動画を見た感想は？

津波の動画を見て、被災地の惨状や津波の恐ろしさを改めて感じました。映像が実際の出来事をリアルに伝えてくるので、非常にショッキングでした。

#### ○質問2. 被害の大きさを実感した出来事は？

津波の映像や被災地を見て、東日本大震災の被害の大きさを実感しました。

#### ○質問3. 交流会で学んだことは？

交流会で学んだことは、震災の恐ろしさや被害の大きさ、被災者の苦労、復興の取り組みなどについて学びました。また、津波の脅威や防災の重要性も再認識しました。

また、他に寄せられた自由記述を集約すると、下記のように要点を挙げることができた。

1. 交流会で被災地の状況や被害の大きさを実感
2. 交流会でコミュニケーションを深め、信頼関係を築く
3. 震災の恐ろしさを学び、今後の行動を考える

自由記述の回答を見渡すと、記述頻度の順に「津波」、「被災地」、「復興力」、「交流会」、「行動」というように並び、伝承館での展示や説明への言及が多く、前浜マリンセンターでの三浦友幸氏（気仙沼市市議会議員）の講話が印象に残っていることがうかがえた。

今回の交流会では、1年生のゼミ教員と学生委員会が学生を引率する形での実施であったが、次に紹介する学園祭行事での企画は、学生自らが企画・運営を行い、他学部の学生や大学周辺の住民との交流を得られるものとなった。その様子を紹介しよう。

## 2. 学園祭企画①カフェ運営

2023年10月21日（土）と22日（日）、4年ぶりに学園祭が開催された。現代社会学科では2、3年生の有志の学生らが企画し、カフェを運営した。その様子を学園記事から振り返ろう。

2023年10月25日掲載の大学HP 現代社会学科ニュースより

記事名：【現代社会学科】①学祭企画「はっぴーきゃんぱす かふえ」

4年ぶりの学園祭

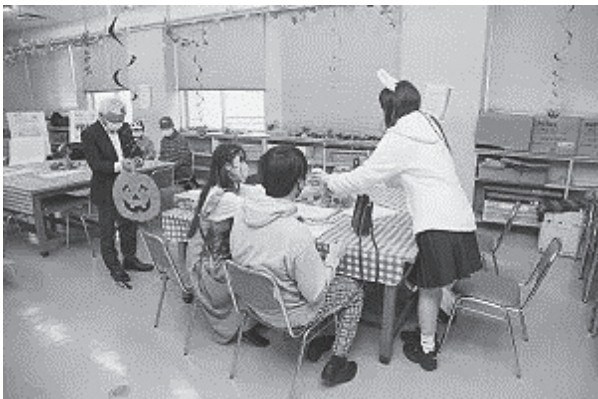
現代社会学科「はっぴーきゃんぱすかふえ」がオープン！



10月のハロウィンのモチーフに部屋を飾り付け「トリック・オア・トリート」の言葉でお菓子がもらえます。

目玉の「クリームソーダ」や各種飲み物の無料提供でカフェを楽しんでいただく空間をひ

らきました。



もう一つの企画は現代社会学部ならではの様々な現代社会の問題について考え、クイズを解いてもらうものです。

カフェを楽しんでいただきながらひと時を過ごしていただきました。

**社会問題クイズ**

**Q4**  
 少子高齢化が進む中地域では様々な問題が発生していますが、その中の一つにゴミ屋敷があります。これらを撤去する際取られる方法は何でしょう

- 1.行政による強制退去
- 2.ボランティアによる撤去
- 3.住居所有者あるいは親族による撤去

**社会問題クイズ解説**

**Q4**  
**答え 1**

正解は1.行政による撤去です。初期段階では書類や直接訪問での片付けを居住者に依頼しますが、居住者がいない場合や片付けを拒否した場合行政による強制撤去が実行されます。

この企画は2、3年生の学生代表が企画を考えました。学生たちのハッピーなキャンパスライフの様子を見ていただけたのではないのでしょうか。2日間たくさんの方に来ていただき大盛況でした。ありがとうございました。

(記事出所：https://www.tbgu.ac.jp/faculty-topics/65528)

### 3. 学祭企画②特別講演会「これからの宮城を考える」

学園祭2日目の10月22日(日)は、学科主催の特別講演会を開催した。これは、2024年度に完成年度を迎える現代社会学科の教育理念を実現する学びの機会を提供するとともに、ひろく一般にも公開する講演会として開かれた。それでは、講演の模様を学科ニュースから振り返ってみよう。

2023年11月6日掲載の大学HP 現代社会学科ニュースより

記事名：【現代社会学科】学祭企画②特別講演会「これからの宮城を考える」

4年ぶりの本格的な学園祭に際し、現代社会学科では、学科での学びを特徴づける「特別講演会」を開催しました。

講演会では、国際連合事務総長特別顧問(人間の安全保障担当)でNPO法人「人間の安全保障フォーラム」理事長の高須幸雄先生をお招きし、「これからの宮城を考える～誰も取り残されないまちを作ろう!」をテーマにご講演をいただきました。



本講演会では、様々な世界的な課題が我々の生活に与える影響を踏まえて、SDGsの目指す世界と「人間の安全保障」の意義についてお話いただきました。

SDGsの国際比較による日本のランキングは166カ国中21位（2023年）と表向きは高評価を得ているものの、ジェンダー平等や環境面への配慮等では多くの課題が見られること、SDGs17の目標の中には、指標の偏りによって先進国ではうまく当てはまらないもの（目標16）があることなど、SDGsの実現に向けて垣間見える国際課題の数々について解説いただきました。



続いて、宮城県の人間の安全保障指数から見えてくる子どもの課題（不登校・いじめ・貧困など）や女性の課題（雇用・家事分担・女性委員割合など）など地域で焦点を当てるべき優先課題について説明され、ご自身が携わる、気仙

沼市をフィールドとするNPO、行政、市民らの連携による「誰も取り残されないまちづくり」の活動についてご紹介されました。



会場の参加学生からは、活発な質問が出され、関心の高さが伺われました。私達が暮らす地域社会に関心を向け、多様な他者に思いを寄せ、行動する事の大切さを考える大変有意義な講演会となりました。

（記事出所：<https://www.tbgu.ac.jp/faculty-topics/65508>）

資料3：学園祭2023学科企画「特別講演会」開催要項

学園祭 2023 学科企画「特別講演会」開催要項

1. 目的：

新たな「共生社会」の創出を目標に掲げる現代社会学部では、福祉の現場や行政の理解に至るまで、さまざまな形で社会構造を捉えられるような視野の広い教育を行うことが求められる。特に、2年次に専攻分けを行う本学科においては、1年生への将来の方向づけを早期に実施することが肝要である。そこで学科企画2では、まず第一に現代の共生社会がどのような構造で形成されるかを深く理解するために、人間の安全保障フォーラム理事の高須幸雄氏に特別講演を依頼する。高須氏は、2015年から謳われている「持続可能な開発目標(Sustainable Development Goals: SDGs)」の理念に根ざした支援、特に学習支援、難民関連の連携・教育、人間の安全保障指標、女性の就労支援などの活動に従事されてきた。よって、今後の共生社会の考え方において欠かすことのできない「誰も置き去りにしない」思考を学生に形成させることができるようになることを考える。また、本講義を外部にも「公開」とすることで、コロナ禍で大きく損なわれた本学科のプロモーションの機会を設けることにも繋がると考える。

2. 日時：2023年10月22日(日) 13:30～15:00

3. 場所：階段教室1

4. 参加者：現代社会学部現代社会学科1年生(必須)、その他

5. 講師：高須 幸雄氏

講師略歴：国際連合事務総長特別顧問(人間の安全保障担当)

日本ユニセフ協会副会長

前国連事務次長(行政監理局長)

元国際連合日本政府常駐代表(国連大使)等歴任



## 6. 講演内容：「これからの宮城を考える～誰も取り残されないまちを作ろう！」

これからの宮城を考えるには、持続可能な開発目標（SDGs）と人間の安全保障の枠組みが有効である。コロナ禍やウクライナ戦争、気候温暖化など世界的な課題が我々の生活に与える影響を踏まえて、SDGsの目指す世界と人間の安全保障の意義を理解する。

SDGsの理念は、最も遅れたところに第1に手を差し伸べ、「誰も取り残されない社会」を実現することであり、地域社会毎に進展を図る必要がある。そのためには、①まず、地域の特性を生かしつつ「誰がどこで取り残されているか」を可視化し、②地域の優先課題を明確にし、③課題の解決に向け、地域の行政と市民が実践し、活動することである。

都道府県別および宮城県内の市町村別に、地域ごとの優先課題を可視化した人間の安全保障指標、子ども・女性関連の指標をご説明する。実践例の気仙沼プロジェクトをご紹介して、市民が出来る実践活動を考える。

## 6. スケジュール

司会：犬塚剛准教授

13:30	開会のあいさつ	豊田 正利 学部長
	講師紹介	山崎 真帆 助教
13:40	特別講演 「これからの宮城を考える ～誰も取り残されないまちを作ろう！」	高須 幸雄氏
14:40	質疑応答	
14:50	閉会のあいさつ	加賀谷 豊 学長

## 4. 1年生と3年生との合同交流会を実施

最後の交流は、2023年12月8日（金）にスポーツ大会として実施された。この交流会も3年生の有志学生らが企画をし、当日の運営を行った。その様子を記事から見てみよう。

2023年12月18日掲載の大学HP 現代社会学科  
ニュースより

記事名：【現代社会学科】1年生と3年生との  
合同交流会を実施しました

2023年12月15日（金）の午前に本学の体育館にて、1年生と3年生との合同交流会を実施しました。交流会では、パン食い競争と借り物競争、ドッジボールを3年生有志と1年生、ゼミ教員らとともに行いました。



写真1：パン食い競争の様子

最初の種目はパン食い競争です。「衛生面に配慮して、包装したままのパンを手で取る方式にしました」とは、交流会を企画した3年生の

談。そのために、走者の手が簡単には届かないように、高く吊り下げています。6つのパンはそれぞれ種類が違って、この写真の走者たちは、お目当てのパンをとるために一瞬立ち止まって、真剣に選んでいます。中には、助走の勢いのままにつかみ取ったところ袋を破裂させてしまい、周囲にカレーの匂いを漂わせつつゴールする走者も。



写真2：借り物競争の様子

次の種目は借り物競争です。指示した札に書かれたものを借りるため、持っている人や当てはまる人を探しています。「ひげを生やした人」の札を拾ってしまった人。本日の参加者に、該当する人物はいませんでした。不運ですね。



写真3：着順の景品と参加賞をもらいました

それぞれの種目では、着順ごとの景品と参加賞が配られました。残念ながら「ひげを生やした人」を借りられず順位がつかなかった人にも、参加賞があります。



写真4：参加賞は懐かしいおやつ

参加賞もなかなか豪華でしょう？ どこか懐かしさを感じるお菓子の詰め合わせですね。写真にはないけれど、このほかにビスコも入っていました。なぜ写っていないのかって？ 懐かしさのあまり、この記事を書いている昭和生まれの中年教員が、撮影前に食べてしまったからです。「フーセンガムも、子どもの頃の箱と変わっていないなあ」と、私だけでなく感慨にふける教員がいましたよ。これらを用意したのはもちろん3年生。令和の御代の大学生も、小さいころに食べていたのですね。



写真5：最後は全員でドッジボール

最後は、全員でドッジボールを行いました。「ドッジをやるのは、小学校以来だ～」と、学生たちは大はしゃぎ。たいへん盛り上がりまし

た。この後、記念品が全員に渡され、お昼に準備されていたおにぎりとお茶で腹ごしらえをした学生たちは、それぞれ午後の授業に臨みました。

これまで、コロナ禍で学生間の交流の機会が持てずにいましたが、短い期間に企画を立て、限られた予算で運営の準備をしてくれたのは、3年生の有志達でした。こうした行事を体験できずにいた学生だけに、フットワークよく切り盛りする姿に、我々教員はたくましさを感じました。

(記事出所：<https://www.tbgu.ac.jp/faculty-topics/66224>)

そのほか、4つのゼミでパラスポーツやボウリング大会、1・3年生合同のクリスマス会などの交流が行われた。

## 5. まとめ

6月の震災復興フィールドワークに始まり、10月の学園祭のカフェ運営と特別講演会の開催、12月のスポーツ大会というように、学生間での交流の機会を持つことができた。コロナ以前では、こうした催しが自然に行われていた。しかし、コロナ禍で行事が中止に追い込まれる中で、上級生から下級生への催しごとの経験の蓄積が伝わる機会が途絶え、経験値がゼロ、あるいはマイナスの状態からの企画と開催であった。

フットワークの良い3年生を中心に有志の学

生が集まり、そこへ1年生が参加する形の交流の場がつけられた。現在の1年生は高校生時代をほぼコロナ禍での自粛主体の生活様式を送り、3年生においても高校最後の時期からコロナ禍に突入し、大学生に入学して以来2年以上も、学生らしい行事や交流の場を持てなかったことになる。

コロナが5類に分類変更された2023年5月以降も、長らく強いられてきた自粛主体の学生生活で、行動が委縮してしまっているように思われていた。ところが、交流会を実施してみると、多くの学生たちが待ち望んでいたかのように参加し、企画は大いに盛り上がった。

一方で、企画に参加せず没交渉なままにいる学生も、少数ながらいる。コロナ以前からそうした学生はいたが、コロナ禍以後はそうした学生が交流のないまま孤立し、休退学へ至ってしまう事案の増加と深刻化が問題となっている。

積極的に交流会に参加した者同士は、お互いに時間を共有したことから結束や団結が強まる。その一方で、催しやイベントごとへの参加に気後れするような消極的な学生は、そうした結束や団結の輪に入っていくことがますます難しくなってしまう、居心地の悪さや所在なさを感じてしまう。交流の機会を積極的に作るに際して、こうしたコントラストを生んでしまう側面にも注意が必要だろう。

どんな学生にも自分の居場所があると思える大学をつくるには、どうしたらよいのだろう。今後の課題が見えたところで紙幅が尽きた。課題の論考は別稿に譲り、筆を擱く。